
ガイア ギア～マハの興亡～

< o 0 o >

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ガイア ギア〜マハの興亡〜

【Nコード】

N6868V

【作者名】

<000>

【あらすじ】

宇宙世紀186年、ザンスカール帝国をはじめとする反地球連邦政府運動を抑える為、地球連邦政府は、地球連邦軍内にマンハンティング部局を設立することを宣言した。その後、マンハンター、通称マハは、疑うを罰するという独自の強行策を用いて、反地球連邦政府運動を弾圧した。それから、7年の月日が過ぎた。

今や黒歴史となった機動戦士ガンダムシリーズ<ガイア・ギア>その中のマン・ハンターをメインに据えたオリジナルストーリーで

す。
ぶつちやけガイア・ギアを読んで無くても大丈夫です。

登場人物くマハく（前書き）

注意

ネタバレを多く含みます。

本編を読んでいる途中、「あれ？誰だっけコイツ？」と思った時に読むことを推奨します。

本文では、上から登場順に並んでいます。

新登場キャラは、順次下に追加していく予定です。

そのところ、悪しからず。

登場人物<マハ>

以下、本編登場順です。順次、追加していく予定です。

・順風亭Ⅱ風天（少佐）

年齢：？？？

性別：両性？

みんなお馴染み風天少佐。本作品の主人公。外見上はただのおばさんだが、実年齢は相当のもの。それも当然、彼女（？）は絶滅したはずの烏天狗なのである。なので、そこそこ身長はあり、髪は真っ黒である。

マン・ハンターのエースとして、かつては縦横無尽の働きをしていたらしい。

軍に入ったのは、グリプス戦役時、アールス中佐に拾われたのがきっかけとなった。

愛機はグリプスの頃から行くと、ネロ、スタークジエガン、グスタフカール、ジエムズガン、ガウツサと、やたらと量産機が多いのが特徴。

噂では実は男性信仰の心情があるだとか・・・。

・ビジャンⅡダーゴル（大佐）

年齢：極秘事項

性別：男

実質マン・ハンターを率いているといえる人物。そのカリスマ性は非常に高く、彼に心酔している軍人は数知れず。今はマハの大佐として淡々と任務をこなしているが、その胸の中には地球にマハの帝国を作り上げ、地球環境を人間の手で再生させるという野望を秘めている。かなりのロマンチストであり、連邦の士官には珍しくニュータイプが存在も信じているが、ニュータイプでは世界を変える事は出来ないと思っている。

・チギリス＝プル（伍長）

年齢：12歳

性別：女

生き残り・・・というか、余り物のクローン強化人間。長い間冷凍カプセルの中で眠っていたが、近年風天少佐が偶然発見、解凍したほかのプルシリーズと同様、強力なニュータイプ能力を持ち合わせている。髪はオレンジ、瞳は紫。マリーダさんよりは、プルツィに似ている。

因みに、カプセルから出たとき、そこにいた風天少佐に向かって「貴方が私のマスターか？」と言ったことは黒歴史となっている。

・シュタイン＝ベール（少尉）

年齢：????

性別：男

無口な少尉。彼も普通の人間ではないらしいが、本人が喋れない事、風天の口が堅い事のために彼が何者か知る人は今だいない。格闘能力が素晴らしく、MM戦でも格闘が戦闘のメインとなる事が多い。が、ベテランらしく、射撃もそこそこでき、いつも冷静に戦況を判断する。

かつては風天少佐と共に戦っていたらしく、愛機はジェムズガン・シュトツァーという近接格闘カスタム機に乗っていた様だ。なにげに風天少佐の機体より高性能だったりする。

・ミナンダスウ（曹長）

年齢：22歳

性別：男

シュバッテンの通信氏。士官学校上がりの将校であり、実はMM操縦も出来てしまう凄い人。気軽な人物であり、アルベルト等ブリッククルーの中でも明るく生きようとする。だが、空回りすることもしょっちゅうあるとか。

・アルベルト＝エイム（大尉）

年齢：56歳

性別：男

小太りした不気味なメガネの太つちよ。一応シュバツテンの艦長を勤める。思ったより高い能力を持っており、その能力を買われて風天に抜擢された人物。今では、風天のよき友となっている。

ついでに言っておくと、オタクである。そっちの話が始まると止まらなくなり、クローゼのストレスの一つとなっていたりする。空気はちゃんと読もう！！

・クローゼ＝ヘルツ（中尉）

年齢：49歳

性別：男

アルベルトの後輩。ゲツソリ痩せた体格でクルーからはイカ男と言われている。シュバツテンの副艦長を勤める常識人であり、ブリッジで暴走する風天少佐とアルベルトと制止するのが日課になっている。

冷静な判断力を持ち合わせ、これまでアルベルトをカバーしてきた、屋根の下の力持ちである。

・ラルバ＝ロツシ（中尉）

年齢：52歳

性別：男

自称40過ぎのオッサン。だが、実年齢は既に50を過ぎたロートルである。ハル、シュタインを率いた連携攻撃の隊長を勤める。バランスのとれた能力は、クルーからの評価も高く、部下の面倒見もいいことから、広く信頼されている。最近では、若僧に負けない様に努力している。

幼い頃、テレビでザンスカール帝国のギロチンを見てから、それがトラウマとなり、唯一の弱点となっている。

・ハルリックマン（軍曹）

年齢：21歳

性別：男

士官学校を出たばかり・・・というわけではないが、彼から滲み出る若さが、彼を新米だとイメージ付けられる。お陰で、みんなから新米扱いされ、同期のミナダからも呆れられている。射撃の腕がいいが、しょっちゅうパニクる。なので、いつも足を引っ張ってばかりだが、最近ではラルバやシュタインに食らいついていける様になった。

・アテルイ＝イルマ（曹長）

年齢：27歳

性別：男

シュバツテンの整備長。サイド7において、その能力に目をつけられ風天少佐に引き抜かれた人の一人。今の時代には珍しい、日本人の顔と蒙古斑を持つ。ニュータイプの素養があるだとかないだとか。曾祖父はあの有名なアムロ＝レイであり、彼の才能を確実に引き継ぎ、さらには曾祖母であるベルトーチカ＝イルマの口うるささを兼ね備え、正に最強である。（パイロット達に対して）

・ニヨルズ＝アスラビスク（准尉）

年齢：22歳

性別：女

シュバツテンのオペ子。ロシア系の人物であり、非常に肌が白い。実は士官学校をオペレーターとしてではなく、戦術予報士として卒業しており、自分の意見を言うタイミングをいつも伺っている。このシュバツテンには志願して来たようだ。理由は、風天に会いたいと言うものだが・・・。

・ビシャ＝イザヨイ（准尉）

年齢：24歳

性別：男

アルビノ体質の将校。今はセラーナの護衛としてグラナダにいる。スタイル、物腰などが女らしく、良くからかわれていたが、今はそれを自分の武器として使っている。

・セラーナ・カーン（中将）

年齢：119歳

性別：女

最早語るまでもない人。マハを裏から操る地球連邦政府高官。「ルック・アット・ミイ」を参照して貰いたい。

・マリーヌ・ナジス（大尉）

年齢：不詳

性別：女

ダーゴル大佐の秘書。ダーゴル大佐に心酔している人物の一人。美人であり、才能もある。なので、他の将校からの人気は高いが、彼

等の間ではもっぱらダーゴル大佐を独占しようとしている残念美人と断定されているようだ。

登場人物くその他く（前書き）

注意

ネタバレを多く含みます。

本編を読んでいる途中、「あれ？誰だっけコイツ？」と思った時に読むことを推奨します。

本文では、上から登場順に並んでいます。

新登場キャラは、順次下に追加していく予定です。
そのところ、悪しからず。

登場人物<その他>

以外登場順となっております。

・ジャック＝ブルーム

所属：メタトロン機関

メタトロン機関のパイロット。50を過ぎているオッサンだが、その腕は衰える所を知らない。
実は、メタトロン機関が軍を組織し始めた頃からのメンバーであり、かつてのメタトロンというものを良く知っている人物の一人である。今のメタトロンの組織的な構造に、彼は反感を抱いているようだ。
ニュータイプの素養があり、風天隊との戦闘でその能力をかいま見る事ができる。

・マドラス＝カリア

所属：メタトロン機関

メタトロン機関のパイロット候補生。明るく、気前のいい性格の持ち主。パラオで鉱山従業員のふりをしながらMMの練習に日々明け暮れていたようだ。だが、MM操縦の腕はあまり良くない。なので、風天隊の追撃には参加しなかった。原作ではアフランシを導くキーキャラの一人。

・ファラッグリフォン

所属：ベスパ

ベスパのエースパイロット。元々は地上部隊の一指揮官であったが、様々な経緯を得て、強化人間となってしまうた哀れな人。彼女の頭の中には何時もギロチンが下りて首が飛ぶビジョン、人々の悲鳴、そして鈴の音が鳴り響いている。異常なニュータイプ能力で、ウツソを含むリガミリティアのパイロットを圧倒した。

・アンディ

所属：メタトロン機関

メタトロン機関の現エースパイロット。素晴らしい腕の持ち主であり、少数しか生産されていないV2ガンダムアサルトバスターを任されている。元々はリガミリティアのパイロットであり、当時ファラッグリフォンに落とされたらしく、トラウマになっている。

風天の動きを見て、風天をファラッグリフォンと勘違いしているが、動きだけで相手をニュータイプと察知できる所はさすがエースである。

・ハマーン⇨カーン

所属：ネオ・ジオン

アクシズの摂政。最強クラスのニュータイプと言われた人物。セラーナの実の姉であり、幼い頃はシャア大佐とイチャイチャしていたとか……。

当時は非常に人望の厚い人物であったが、100年以上の年月が過ぎた今、シャア「アズナブル」の影に隠れる存在となっている。

・アーレス「ドゥー」

所属：カラバ、地球連邦軍^{エウロコ}、ロンド・ベル

最早語るまでもない人物。とんでもないマッドサイエンティスト。直接的には登場しないが、本小説のキーキャラである。「ルック・アット・ミー」を参照して貰いたい。

・ラーメン屋の親父

所属：グラナダ市民

なんでコイツがこんな所に……と思った方、正にその通りです（オイツ

グラナダでも地元勢しか知らない極上の一品を作りあげる凄腕。スラム街で育つたらしく、ケンカに強く、パンチの威力は物凄いものがある。何時も屋敷を抜け出したセラーナが食べに行く所でもある。

・トライム≡ザビ

所属：ズイー・ジオン・オーガニゼーション

ザビ家の末裔。オードリー≡バーン（ミネバ≡ザビから正式に改名）の孫。ザビ家の血を受け継いでいる・・・はずだが、なぜかコマ扱
いされている。

ジオンを裏切り連邦の、しかも特殊警察マンハンティング（マハ）
に肩を貸すセラーナを酷く憎んでいるようだ。

メカニックレポート（前書き）

ガイア・ギアはZガンダムと同時に描かれた、閃光のハサウェイの続編ストーリーです。

そのため、Vガンダムとの設定の差異が非常に大きいので、ある程度調整しています。

また、ネタバレを多く含みます。どんなシーンだったか忘れた時に読むことを推奨します。

メカニックレポート

ガウツサ

頭頂14.9メートル（原作より5m程小さい）

地球連邦軍正式採用量産機。

ザンスカール帝国の恐怖が去った後、危機感を感じた地球連邦政府が制作したマンマシーン。

時代の差を感じさせる、圧倒的な出力を誇る。その出力は、前世紀の傑作MS、Vガンダムを大きく上回る。

ガウツサ5630kw（原作より多め）、Vガンダム4780kw
このマンマシーンの登場により、モビルスーツが旧世代のマシーンと言われるようになった。

武装は、主にビームライフル、シールドスパイク、サンドバレル（散弾銃）、ビームサーベル、ビームシールド（原作では無し）、ビームランチャー、拡散ビーム砲。

状況によって様々な武装を使い分ける万能機である。

ドハディ

頭頂14.7メートル（上に同じく）

メタトロン機関のオリジナルマンマシーン。

主に偵察に使われる機体。なので、戦闘力は乏しい。

武装はほとんどなく、ビームサーベル、ビームライフル、偵察用ポ

ツド程度のもの。
装甲も貧弱。やはり戦闘にはむかない。

Vガンダム

頭頂15・3メートル

前大戦で活躍したMS。
だが、もはや時代遅れである。
メタトロン機関の主力MSとなっている。

武装はBサーベル、Bライフル、Bシールド、バルカン、八の手サ
ーベル。

変形機構を採用しているため、必然的に装甲は薄い。
そのため、ガウツサのBライフルを受けるとひとたまりもない。

V2ガンダム

頭頂15・6メートル

前大戦で決定力となった元リガミリティア所属、現メタトロン機関
のEー用MS。

ある程度量産性はあるが、この機体の最大の特徴である光の翼は味
方までも巻き込む強力すぎる兵器であるため、この機体よりVガン
ダムの方が実働数は多い。

機体出力は7560kWと、一様ガウツサを上回っているが、エネルギー効率が悪く、もはや旧世代機扱いされている。

武装はBライフル、マルチプルランチャー、Bサーベル、Bシールド、バルカン。

アサルト装備とバスター装備がある。

ゾーリンソール

頭頂15.7メートル（原作より5m程小さい）

メタトロン機関が戦力不足を解消するため開発した、オリジナルマシン。

非常に高性能なマンマシン。

その性能はガウツサを大きく上回る様だ。

武装はBライフル、Bサーベル、Bシールド（原作には無し）、ファンネルミサイル、ゾーリンファンネル（別名ロングフィンファンネル）等。

サイコフレームやバイオセンサーまでも搭載したニュータイプ専用機である。

さらに、ミノフスキーバリアを搭載しており、遠距離ビームやバルカン等のちよつとした武装は無力化でき、通常ビームも威力を減衰させることが出来る。状況によって、出力を調整することが可能。

シュバッテン級戦艦

地球連邦軍がベスパから接收した戦艦。

特筆すべきは、その攻撃力にある。

地球連邦軍の戦艦を未だに凌いでいる。

マンマシーン用に回収されたデッキは10機以上の機体を収容できる。

ビームシールドを張ることにより、大気圏突入することが可能。

当然大気圏航行能力、大気圏突破能力ももつ。

風天少佐の艦は幾多の改修により、強行突破、強行偵察に優れた能力を持つ。

近年開発されたミノフスキーバリアを搭載。防御力も素晴らしい。

ラーカイラム級戦艦

みんな良く知ってるあのラーカイラム級。当然時代遅れの骨董品であり、最早今の戦場ではただの的。だが、それなりの量が残っており、今現在も使用されている。

ロゼット改^{サクモト改}

頭頂14・2メートル

謎の組織、ズイージオンが使用するマンマシーン。その性能は、ガウッサに匹敵する。

ベーシックな装備をもち、Bライフル、Bサーベル、Bシールド、メガビームランチャー、サンドバレル。特に弱点がないのが特徴である。

リゲルグ改

ガルバルディもどき

頭頂14・7メートル

謎の組織、ズイージオンが使用するマンマシーン。量産型の様だが、この機体は、ガウツサを性能を上回っている。だが、ゾーリンソールには届かない様だ。

武装は、RFゲルググと同じで、Bライフル、Bサーベル、Bシールド、グレネードランチャー等。

ゾーリンソールと同じく、ミノフスキーバリアを張ることが可能の様だ。

光る流星

時は宇宙世紀、ザンスカール帝国の恐怖から免れた地球連邦政府は、反地球連邦活動の鎮静化のため、独自に特殊警察部隊を組織した。これがのちに大事件を引き起こした、通称<マハ>である。マハは、ビジャン・ダーゴル大佐を中心に、地球連邦内部での権力を増やしていった。その動きを見て、マハを危険と判断した一部の人々は<メタロン機関>を創設。水面下で、両者は対立していた。そんな中に、マハに、一人の将校が訪れるのであった。

「・・・はあ。マン・ハンターに異動か・・・」

その将校は、月発の地球行きシャトルの中で一人呟いていた。その蒼白な顔はひとりで窓外の地球を眺めていた。その面影は、見るものを魅了しているかのようであった。それもそのはず、彼女は、人間ではない。もはや絶滅したと言われていた、最後の<天狗>なのである。

「地球か・・・。懐かしいなあ・・・。全く、またあの重力を受けて暮らすと思うと、気が引けるってもんだなあ。ま、仕事だからしょうがないか。」

彼女の意識は、自然と懐に納まった命令書に向いた。今更紙の命令書なんて変だと思えば、それがあのビジャン・ダーゴルからの直々の御達示っていうんだからなあ。・・・ホント、参ったな、とでも考えているのだろうか？

「ピュ」。間もなく、大気圏突入します。シートベルトを、御確認下さい。」

聞き慣れた声が大気圏突入を告げる。今まで様々な事が変わってきたというのに、この声だけは全く変わる気配がない。変革を求めながら、変革を拒んできた人類。彼女は、それをうっとおしく思い、そして、愛らしく思うのであった。

シャトルが大気圏突入に入り、機内が、激しい振動に包まれる。将校は、命の無事を祈り、目を閉じた。

そして、一筋の流星が、地球に落ちていった。

光る流星（後書き）

次回予告は無しにしました。
今後もよろしくお願いします。

森の向う

ノイシュヴァインシュタイン城。

それは、環境汚染の進んだこの地球に残された、数少ない中世の城だ。周りは森林、そして緑の山々に囲まれ、ここは外界とは別の世界であると錯覚させる様な所だ。

彼女はいま、その森林にできた小さな道を辿り、城に向かっていく所だ。整備されていない地面に、車は激しく揺れる。が、そのことが逆に、自然のなかにいるという実感を、そして、地球の重力の感蝕を与えてくれた。

森を掻き分け、その先に見えてくる城。その全容が明らかになったとき、彼女は、無意識の内に「美しい・・・」と呟いていた。

「そうだろう。まさに自然を愛した中世の人々の美德を表している。」

突如、城の奥から聞こえてくる声。

その声の主は、あのビジャン・ダーゴルく大佐。一人でマハを築き上げたといわれ、多くの兵に崇拜されている。そして、ロマンチストである。別にこれは悪い事ではない。むしろ、それだからこそ尊敬を集めたのであろう。このノイシュヴァインシュタイン城を会合に選んだのも、そのことを表している、と言えよう。

「ダーゴル大佐。こんな所に来て大丈夫なのですか？」

「いや、ここに来るものはおるまい。それに、わざわざ空から招いたのはこちらなのでな、順風亭〓風天大尉。」

ダーゴルの異様な礼儀正しさに違和感、というか不気味な感覚を覚える風天。

「さて、森林浴でも楽しみながら、話をしようではないか。」

「……危険です。いつも最悪の事態を考慮すべきかと思いますが？」

「その最悪の事態を、君ならば察知出来るのではないのかね？それに、こんな美しい自然、またと見られるものではないぞ、天狗殿？」

「やめて下さい。もう私は天狗ではありません。」

だが、風天の警告も虚しく、ダーゴルは森の中に入っていく。慌てて駆けていく風天であった。

どれ程進んだのだろうか。森はますます深くなり、もう周りには木しか見えなくなっていた。突然、ダーゴル大佐がこちらに振り返った。

「古来、妖怪とは、自然の中から生まれたと聞く。風天大尉、君はこの自然を見て、どう思った？」

「どうと言われましても……。ただ、美しいとだけ感じました。」

少し考えるそぶりを見せる大佐。

「・・・そうか。どうやら、君を招いたのは間違いではなかったよ
うだな。」

「は？」

意味が分からず、首を傾げる。

「風天大尉、君は、メタトロンをどう思う？」

「メタトロン、ですか。私は、彼等の理想には賛同しますが、彼等のやり方は、逆に地球を汚染する可能性があります。」

「なら、今の地球連邦政府はどう思う？」

「それは、メタトロン機関よりダメだと思います。彼等は、未だにこの地球に居座り続けようとしている！これは、いまずくに修正されるべきだと思います。この地球のためにも。」

そういつてから、風天は、しまったと思った。いつも思っていた自分の本音をこつも簡単に引き出された事に対して。
ダーゴルといえば、とても嬉しそうだ。

「そうか！実は私もそう考えていた。地球連邦政府の高官共は、自分の事だけ考える連中が増えてしまった。しかし、メタトロンのように、外部から変革をもたらそうとしても、歴史が語る通り、いつも無駄に終わった。だが、私は違う。私は、このマハと共に、地球連邦政府に、内部から変革をもたらす！そして、地球にマハの帝国をつくり、我々の手で、地球を<保護>し、<再生>するのだ！このことは、まだ誰にも話してはいなかった。さあ大尉、君はどうする？」

「マハの・・・帝国？」

風天は考える。地球を汚した人間達が責任をもって地球を再生させる。その考えはいい。しかし、本当に可能なのだろうか？いや、可能なわけがない。だが、彼女は今のなにも変わらない世界に飽き飽きしていた。そして思う。どうせ何も変わらないのなら、自分が馬鹿をやればいい、と。決心が付き、彼女は返事をする。

「有り難く、自分も参加させて頂きます！」

これではこの男の思い通りだが、それも面白いかもしれない、と彼女は考える。その思考はもはや手遅れだった。彼女は、知らぬ間にダーゴル大佐に魅せられたのだ。

「ならば風天大尉、君は今から少佐に昇進してもらおう。さて、いきなりだが、君に任務を与える。」

と、またく紙の命令書を渡される。その内容に目を通し、風天はニヤリと笑った。そして、二人はもときた方向へ足を進めるのだった。

パブにて。

宇宙空間を進む一基のマンママシン。地球連邦軍正式採用の量産機、ガウツサである。そのガウツサは、隕石の陰に隠れながら慣性にしたがって流れていった。その先にあるのは、旧世代の資源衛星<パラオ>である。そして、そのガウツサの後ろには、隕石に紛れてさらに巨大な陰が息をひそめているのであった。

そこは、一昔前とは違い、人々の熱気に溢れていた。人々は道を行き交い、街の明かりは消えることを知らない。そんななかに、人混みを掻き分け、街の路地に入っていく者の姿があった。風天少佐である。風天はその脇にあったドアに入っていくのであった。

そこは、街の雰囲気とは違い、下町のパブらしい薄暗さを持っている。風天はバーテンダーに何かを話し掛ける。すると、奥から一人の女性が出てきた。その女性は、バーの薄暗さにそぐわない立派なオレンジ色の髪と紫色の目を持っていた。

「そろそろ来る頃だと思っていたよ、風天少佐。」

「さすが情報が早いな、チグリスIIプル伍長。」

プル少尉。彼女は、旧世紀の戦闘用ニュータイプクローン<プルシ

リーズ>の生き残り・・・というか余り物である。そのわけはというと、彼女は近年風天少佐によってコードスリープから解放されたばかりであり、その戦闘能力に目をつけた風天少佐は、行き先のない彼女に地球連邦軍に入ることを進め、ここパラオに配属<させた>のである。プル伍長はここパラオで、メタトロンや旧ジオン勢力のお調査にあたっていたのであった。

「それで、ここに来たと言うことは、めぼしい物がここにあったというわけかい？」

相変わらずの口調に呆れるのではなく、逆にほっとする風天。

「その通り、これをみたまえ。」

懐からダーゴル大佐の命令書を引き出す。それをプルは、食い入るように見た。

「・・・成る程、心当たりはある。後は、戦力の問題だ。」

「ということは、戦力さえあれば可能だということかい？」

「そうだ。しかし、それにしても、まさか慎重なあんたがこんな作戦に参加するとはねえ。どっという心境の変化だい？」

風天の顔を覗き込むプル。

「なに、なにもない生活よりかは楽しいだろう？」

「楽しい、か。ふふふ、ははははは！ー！そうか！アンタもこの世界

にスリルを求めたって訳か!!」

「まあ、私も人間だからな。退屈には堪えられん。戦力はステルス艦にマンマシーン3機ほどだ。さてどうする?」

そういうと、プルは考えるそぶりも見せず即答した。

「決まっているじゃないか。アンタに、地獄の底まで付き合ってるよ! さあ、この世の導火線に火を点けようじゃないか!!」

「そうこなくては!!」

そして二人は、お互いの手を握った。

蠟燭の灯

暗い街を走るエレカ。それに乗る一人の男。エレカは、街を出て、資源衛星の端の方に向かった。

その男は車から降りて、パラオの端に昔からある坑道の一つに入った。坑道を走る男。天井は、ラプラス事件の折に入ったひびで今にも崩れそうだ。壁に架けられた蠟燭が暗い廊下を照らす。所々彫られたキリストの像が時代を感じさせられる。

男は思い出す。神が世界を支配していた時代を。そして、ラプラスコロニー爆破事件。一年戦争。シャアの叛乱。アデレード襲撃。彼には、そんな変革を求めてきた人々に対する思いが走馬灯のように流れていった。

坑道の向こうに周りにそぐわない機械的なドアが見えてくる。エアロックである。彼はそれを見ると、近くにおかれた、というか浮いているノーマルスーツに手をかける。直ぐに着替え、ハッチを開けた。ジェットノズルを使い、無重力空間を飛んでいく男。その先には、あのマンマシーン、ガウツサが固定されていた。

暗礁宙域に潜む巨大な陰。その正体は、黒く塗られた地球連邦軍所属シュバツテン級艦だ。戦後、ザンスカール帝国から接收した旧世代の戦艦だが、その能力は昔を大きく凌いでいる。ボディに取り付けられた大量の光学センサーは圧倒的なステルス能力を与えていたが、静かに潜む船とは違い、今、そのブリッジは慌ただしい空気に包まれていた。

「船長、シユタイン機からの暗号通信です。」

「やっと来たか。ミナ ندا、直ぐに解析しろ。」

止まっていたブリッジが急に活気を取り戻す。その数分後、解析が終わったのか、ミナ ندا通信氏が声を上げた。

「風天少佐からの連絡です。作戦実行は600時、プランC決行。諸君らの健闘に期待する。とのことです。」

艦長席に座る小太りな男は、副長に話し掛ける。

「いや、それにしても、まさに無茶苦茶な作戦を選んだものですね。あ。マンマシーン三機で陽動しろだなんて。」

「いや、新型マンマシーンを手に入れるには犠牲をも厭わない、という事でしょうな。アルベルト艦長。」

アルベルト「エイム大尉。風天少佐のよき相棒のような人物であり、このシュバツテン級の艦長である。小太りな体格に眼鏡によってさらに怪しさをました顔付きは慣れないと不安に感じてしまうものだ。

クローゼ「ヘルツ中尉。この船の副長である。アルベルトとは士官学校の先輩後輩の関係にあたる。アルベルトとは対称的に、ゲツソリと痩せた体格を持つ。彼の落ち着いた風格は、クルーを安心させる。

ひとさわぎあった後、ブリッジは再び静寂に包まれた。

朝早くから賑わいを取り戻した街。エレカを駆る風天とプル。再び慌ただしくなるブリッジ。パラオの、そして世界の均衡が破れようとしていた。

マハの恫喝（前書き）

今回でとうとうマンマシンの戦闘。ちゃんとメカニクレポートを読まないと内容が掴めないかもしれませぬ。

オリキャラについて

風天の風貌についての補足。

<髪>

黒髪 + 所々白髪

短く切り揃えている。

<顔付き>

東方の射命丸文の様な顔付き。

アイカラーは深紅（赤ではない）<スタイル>

胸はそれなり。

全体的に軍人らしいガッチリとした体つき。

マハの恫喝

パイロット達がマンマシーンの中で緊張した表情で座っている。ブリッジは、いつもながら静寂に包まれているが、底にはピリピリと張り詰めた空気があった。

アルベルトが真剣に太い腕で今にもはち切れそうな腕時計を見つめる。そして、ついにその長針と短針が一直線になった。

「作戦開始！マンマシーン隊、発進！！」

「エンジン点火！各砲台起動！！」

シュバッテンのカタパルトから、三機のマンマシーンが飛び出していくのであった。

そこは、1世紀前と同じような活気を取り戻していた。それもそのはず、旧ネオジオン残党、袖付きの使っていたここパラオは、今やメタトロン機関の秘密基地の一つとなっていたからだ。パイロット達が廊下を走り、ノーマルスーツ置場に急ぐ。外から鳴り響く声。

「我々はマハである！ここにはメタトロンの基地があるという疑いがかけられている！よって、強制的にこの衛星を、排除する！」

その声に、怒りで肩を震わせるパイロット。その一人に、ジャック
「ブルームがいた。」

「なんて奴らだ！一般市民を何とも思っていないのか！」

その他のパイロットからの同意の声が上がる。その時、基地が大きく揺れた。Bライフルを使ったのだらうか？ジャックは、上官の命令などまっぴらと、素早くノーマルスーツに着替え、部屋のドアを開けた。だが、その瞬間、パイロット一同は気を失うこととなった。

「さすがのお手並み、拝見させて頂きました。」

パチパチとノーマルスーツ置場に鳴り響く音。その音源は、あのプル伍長だ。となれば、当然その横に立っているのは風天少佐である。

「まあ、この程度なら朝飯前つてとこよ。」

「やっぱり、天狗は違うねえ。」

「私はずいぶん前に天狗を辞めたって言ったが？」

いつものように軽く受け流す風天。そして二人は、側にあったノーマルスーツを手にとった。

宇宙空間を漂う三機のガウッサ。それぞれが各々にBライフルをパラオに向けていた。

「しかし、本当にここにあるんですか、ラルバ中尉？」

「そう思うしかない。それに、ここにメタトロンの連中がいることは確定的だぞ、新米？」

「新米じゃないです。ハルって名前がありますよ！」

「・・・・・・・・・・」

「ははは、俺にとっちゃ、お前はまだまだ新米だ！」

相変わらず口数の多いチームである。彼等は、前から風天少佐の部隊で活躍していたチームだ。隊長は40過ぎの現役、ラルバ中尉、その下に無口、というか喋れないシユタイン少尉、20を過ぎたばかりの新米ハル軍曹と続くデコボコチームとして、地球連邦軍内でも有名だ。

そんな彼等は、Bシールドをいつでも使える体勢を取りつつ警戒を敷いていた。

「風天さん、大丈夫ですかね？」

「風天少佐だ！それに、あの少佐がこんな所で死ぬわきゃねえだろ！」

「・・・・・・・・・・」

二人が話している中、シユタインはパラオから流れてきた岩塊に目を向けた。

「す、すみません。ついつい弱気になってしまいました！」

「そうそう、弱気じゃ勝てるもんも勝てなく”ザアッ”・・・」

一瞬通信に雑音が混じる。その瞬間、岩陰からVガンダムがBライフルを構え飛び出す！

「・・・！！」

その瞬間、Bシールドを構えたシュタイン機がハル機の前に踊り出た！

チギリス＝プル

「「!?!?」」

風天とプルが突然振り向く。

今彼女達は、マンマシーンデッキに行くための通路を走っている所であった。ちなみに一様減光バイザーをしているので、外から顔を確認することはできない。

「風天、今のつて・・・!」

「ああ、あいつらの命が危ない!先を急ごう!!」

そういつて、通路を更に早く駆けていくのだった。

突然体が浮く。無重力区間に入ったのだ。風天とプルはすぐにリフトに掴まる。横を何人ものメタトロン兵が通過するが、こっちはこのノーマルスーツを着ているので見つかることはない。

リフトに掴まっているうち、広い空間に出た。マンマシーンデッキだ。

「プル、どいつが新型だ?」

「あっちの天井にかかっている奴だ。」

と会話しているとき、突然後から声をかけられる。

「おい、そこの二人!なにをしている、さっさとマンマシーンに乗

って迎撃しろ!!」

「は、は！了解しました!!」

とにかく適当に返事を返す。こんな所ではれる訳にはいかない。

「ん？お前達、バイザーを上げてみる！」

（まずい！どうすれば）はい、危機と聞いて駆け付けて来ました、マドラス＝カリアさん。」

・・・どうやら知り合いだったようだ。ここは一難逃れられるかも知れない。

「隣にいるのは誰だ？」

「はい、彼は私の友人なんです。私の呼びかけに応えてくれたんです。彼、結構人見知りで・・・」

「そうか、そうだったのか。スマン、疑ってしまっ」

「いえいえ、仕方ないですよ。さて、行くぞ！」

そういつて私を引っ張り、うまく士官を振り切る。さすが、ここに配属してよかった。

そして、私たちは無事にお目当てのマンマシンまでたどり着けたのだった。

コックピットに滑り込む二人。二人が入った後、すぐにハッチが閉じられた。

「よし、プル、頼んだぞ！」

「はいはい、任せときな！」

そういつて、まだ取り付けられている調整用のキーボードを取り出すプル。そして、キーボードを叩き、OS等をマハのものに書き換えていく。そのスピードは、どこぞのスーパーコンピューターも顔負けの代物だった。これが強化人間の實力なのだなあ、と、改めて思わせられた風天であった。

パラオの外側（前書き）

補足説明

シュバツテン級について。

ベスパではアマルテア級として登場しています。

それならなんでアマルテア級と言われていないのか、と言うと、風天少佐の乗艦である修復されたシュバツテンが連邦軍内であまりにも有名になったため、いつの間にかそう呼ばれる様になったということです。

タシロ君、おめでとう（笑）！！

パラオの外側

ウヲォ~~~~ン

元気のいいエンジン音。整備が行き届いている証拠である。風天は少し感心した。メタトロンがいい整備士に対してだが。

「機体名ゾーリン・ソール。機体性能はどれもガウツサより上。試験的に簡易ミノフスキードライブユニットを装着予定。設計図もちやんと入っているな。装備はBライフル、Bシールド、Bサーベル、牽制用バルカン、それに・・・ファンネル？なんでサイコミュ兵器が？」

「もしかしたら、サイコフレイムも付いているのかも知れん。傷つけず持って帰らんといかんな。後は頼むぞ、風天。お前の腕ならなんとかなるだろ？」

「壊しはしないが、無傷で帰れる保証はない。部下の手助けをしてやらんな。」

話している間、その腕は、自然と火の入った機体を、アンバックで動かしていった。

「さてさて、Bライフルは・・・」

「あの一番上の奴を取れ。」

そういつて武器の架けられた壁の一番上のライフルを指すプル。

「どうして分かってんだ？」

不思議に思っただけ聞いてみる。さすがに機体は分かっても武器までは分からないはずだ、と思っただけ、意外な一言が飛び出して来た。

「そりゃ、OSにデータが入っていたからなあ。」

「ああ、成る程。それもそうだ。」

そんなことで、武器と側にあつたEパックをドツサリ持つていく風天がいた。

のんびりコメディをやっている二人は置いて、パラオの外では、今激戦が繰り広げられていた。

「ハル！Bライフルで敵機を引き付けろ！！」

「シュタイン！お前はサンドバレルで牽制しろ！！」

そういつつ飛んでくるビームに応戦するラルバ機。現在、シュタイン機は初めの一撃で右腕とBライフルが弾き飛び、ハル機は右足がやられている。元々、このチームはラルバ機を司令塔としてシュタイン機が切り込み、ハル機が後方支援という形をとっていたので、現在の状況は非常に危機的な状況と言える。そんな中、Vガンダム4機を相手に、新型とはいえ、この三機は上手く敵の攻撃を凌いでいると言えるだろう。

だが、その均衡が今、崩れ去ろうとしていた。

「・・・しまった！一機そっちに行つたぞ！！」

前線で踏ん張っていたラルバ機が、敵機三機の連携攻撃を受け、その脇から一機抜け出したのだ！飛び出したVガンダムはバーニアを吹かし、素早くハル機に接近する！

「く、来るな！！」

「・・・！！」

二機が応戦するが、足のなく、バランスの悪い機体では当たるはずの弾も当たらない。シュタイン機のサンドバレルも上手くBシールドで凌いでいく。

(・・・こいつ、ベテランか！？)

一筋縄にはいかないことを感じたシュタインはハル機に接近するVガンダムを見て、左手にBサーベルを構え、再び踊り出た！

「シュタインさん、無茶です！下がって！！」

そんなハルの声を無視し、サーベルで受け身の構えを取るシュタイン。Vガンダムは、シュタインの軍人魂を感じたのか、同じくBサーベルを構えて振りかぶった！

キイイイイン！！

激しい鏝ぜり合いが起こる。出力に勝るガウツサだが、今機体は激しく損傷し、パワーダウンを起こしている。対してVガンダムは出

力差を埋めるため、更にBサーベルの出力をあげた。
その結果は、分かりきったことだ。シュタイン機のBサーベルは弾
き飛び、Vガンダムがとどめを刺さんと更に接近する！シュタイン
はハルを恨むのではなく、自分の不運を呪うのであった。

パラオの外側（後書き）

Vガンダムとガウツサの性能差は凄いものですが、どうやら相手はベテランパイロットだったようです。

まあ、性能差と言うより、暗礁宙域の戦闘は経験値の差が大きいです。しょうがない。

伝説の復活

シユタインは、目の前で起きたことを瞬時に理解してくしまった。モニターにビームサーベルが輝く。しかし、彼の機体にビームの刃が突き刺さっているのではなかった。彼の目の前にあるガウツサに突き刺さっていたのだった。その意味する所は、ハルが自分の盾になったということであった。

「なんと、あつぱれだ・・・」

敵のパイロットから感嘆の声が漏れる。その声の中に、金属が焼け落ちる音が入った。ハルが最後に、Vガンダムを切り落とし、落ちた音だった。

流れていくガウツサ。シユタインは目の前を見据えた。決してそのパイロットに殺意を抱いた訳ではない。彼の静かな心の内には、軍人としての闘志に燃えていた。

「これで、互角になったな、ガウツサのパイロット！」

「・・・・・・・・」

Bサーベルを握り締める二機。バーニアが勢いよく火を噴き、マシンが激突した。

丁度その時、パラオの入り江では色とりどりのビームが交錯していた。

「風天！上だ！！」

「こいつら、時間稼ぎをするつもりか！」

焦る風天。彼女達は今、3機のVガンダム、2機のドハデイに囲まれていた。黙々と攻撃を回避し続けるゾーリンソール。その時、また彼女の頭に声があった。

「今度はなんだ！？」

「これは・・・ハル！？」

直ぐに感知する風天。その声は、確かにハルの魂の叫び声であった。彼女は自分が間に合わなかったことを悟った。頭がクリアになり、多くの声が頭の中に入ってくる。ラルバの吐息、シユタインの闘志、敵パイロットの焦る声。風天は、操縦桿を強く握る。特徴的な深紅の目は、藍色に変化していた。風天の変化を見たプルは、さっとパイロットシートの裏に回った。

ガウツサはすでに満身創痍の状態であった。

「クッ、くそ、振り切れねえ！」

最早武装はほとんど使用不可能になり、各バーニアは悲鳴をあげていた。今、必死に回避しているが、一瞬でも気を抜けば落とされること間違いないであろう。三機の連携は未だ乱れない。もうどうしようもないと思ったとき、一本のビームが走り、一機のVガンダムを撃墜した。

「・・・何！なんだ！？」

「強奪された新型か？いや、そんなはずは・・・それにこの距離、Bライフルの射程を大きく越えているぞ！！」

一瞬残った二機が乱れる。ラルバはその隙に戦場を離脱した。彼には分かっていた。

「風天少佐・・・黒い神獣の復活ですか。」

そう、地球連邦軍の撃墜王、その名を伝説に残した人物、順風亭「風天の復活を。」

後ろからのレーダーの反応音が響く。その反応の主、ゾーリン・ソールは、暗礁宙域を通常の三倍以上のスピードで移動していた。あの有名なシャアのなんとか飛びである。最早資料に残らないようなこと（ジオンということも含む）なので何跳びかは分からないが、彼女は今、隕石を巧みに蹴って推力を使わず機体を加速させているのだろう。

Vガンダム二機に接近するゾーリン・ソール。迎撃するが、それも虚しく、ビームは軽々と避けられる。ゾーリン・ソールは近くにあった隕石をVガンダムに向けて蹴り飛ばし始める。隕石を破壊しよ

うと、Bライフルを向け、それを一斉に放つ。破壊した隕石の向こうから飛び出してくるゾーリン・ソール。それに対し、予測していたのか、Bサーベルを冷静に抜き放ち、ゾーリン・ソールに切り掛かった。だが、そのことが己を殺す結果となった。ゾーリン・ソールを切った瞬間、マンマシーンとは思えない異常な爆発が起こり、二機を巻き込んだ。

そう、そのゾーリン・ソールは、ダミーバルーンだったのだ。本物のゾーリン・ソールと言えば、素早くラルバ機を回収して、シユタイン機と合流しに行ったのだった。

帰還信号

宇宙に赤色の信号弾が打ち出される。それをシュバッテンのブリッジはしっかりと確認していた。

「艦長！赤色の信号弾です！！」

「やっと我々の出番か。よおし、全砲門、照準、信号弾の発射元！パラオには当てるなよ。」

一応パラオは外しておく。民間人を巻き込んだとなれば、マハの名に傷を付かせることになるからだ。

シュバッテンの砲門が前方に向けて固定される。

「撃てえ〜〜！！」

全砲門が一斉に火を噴いたのであった。

「やるではないか！ガウツサのパイロット！！」

「……………」

睨み合う二機。今、この戦場は膠着状態にあった。腕と暗礁宙域戦闘の経験値が拮抗し、どちらも致命的な一撃が出せないでいた。そんなとき、暗黒の宇宙に一つの信号弾があがる。シュタインは、それを見て一気に頭が醒めた。Bサーベルを引っ込めて反転し、全速

力でシュバツテンに急行する。それを見たVガンダムのパイロットは驚きの声をあげた。

「何！？貴様、勝負を放棄するつもりか！？」

怒りに燃え、Bライフルで追撃しようとする。だが、後ろからの反応がそれを押し止めた。

「ん？この反応は・・・強奪機体か！！」

瞬時に反転し、急行する強奪機体を撃ち落とそうと、スコープを使い狙いを絞った。そして、トリガーを引く。だが、ゾーリン・ソールはまるでこちらが撃つタイミングが分かっていたかの如く回避した。ベテランパイロットは、この驚異的な反応性を見て、恐怖した。

「あれは・・・ファラッグリフォン！？馬鹿な！」

そう、彼は元リガミリティア所属であり、彼の記憶には、ビームをことごとく回避しながら接近してくるゲンガオゾに落とされた記憶があった。風天のニュータイプ能力はベテランパイロットにファラの記憶を思い起こさせたのだ。敵わないと判断したベテランパイロットは、直ぐさまパラオに後退していった。

突然止まるゾーリン・ソール。後ろから追いかけてきたラルバは不思議に思って通信を繋いだ。

「風天少佐、どうしたのですか？」

その質問に応えはなかった。ゾーリン・ソールは黙ったまま、一つの岩塊を除けた。すると、そこには大破したガウツサの残骸があった。

(これは・・・ハルか!?まさか・・・)

一瞬嫌な予感が頭を過ぎる。だが、その予感ばかりで終わった。ゾーリン・ソールはガウツサのコックピットをこじ開ける。すると、中から一つのノーマルスーツが元気よく飛び出してきた。ノーマルスーツから通信が入る。

「ラルバ隊長、風天さん、落とされちゃいました。」

すると、黙っていたゾーリン・ソールは始めて口を開いた。

「全く、苦勞をかけてくれるよ、本当。よしラルバ、この馬鹿を回収するぞ!」

「りよ、了解!」

そうして二機は、ガウツサの残骸を担いで飛んでいった。

月への旅路で

暗黒の宇宙に一つの光。その正体は、パラオを緊急離脱したシュバツテンだ。現在シュバツテンのMMデッキでは、いつもの様な汗臭さや賑やかさはなく整備士とパイロットによる討論が行われていた。

「ですから！予備パーツを使った所でこんなにボロボロになったガウツサを修復するなんてできません！！」

怒鳴る整備長。彼の名はアテルイ・イルマ。サイド7でジャンク屋をやっていた所を風天に拾われた人物だ。顔付きは東洋を思わせる。父方の血を受け継いだようだ。

「むむむ……。流石に無理なものだったか。」

「うわあああ！僕の数少ない出番が！！」

悩む風天、メタな台詞を叫ぶハル。流石にこの先、ストレートに月まで行ける訳がない。必ずメタトロンは追撃してくるであろう。なので、MMも万全の状態にしておかなければならないのだが、やはり簡単にはいきそうにない。

「一応シュタイン機とラルバ機はスペアを使えばなんとかあります。ですが、この機体の修復は、一回大きな補給を受けない限り無理ですね。」

そしてアテルイの発言の後、更にチグリスが追い撃ちをかけた。

「おーい、風天！このゾーリンソール、結構複雑な機構をしている

から、大規模な設備がないとどうしようもないぜ!!」

「ま、マジかよ……。」

急な特殊任務じゃなきゃ、こんなことにはならなかったのに……、と今更後悔する。しかし、敵は待つてはくれない。風天は直ぐに決断を下す必要があった。数分間悩んだ末、風天は一つの決断を下した。

「……仕方がない。ラルバ、一応積んできた私のガウツサを使え!それで三機、揃うだろう?」

「ええ!!少佐は出撃しないのですか!?!」

「…….?」

風天の決断に驚く三人集。彼等は知っていた。彼女はこのガウツサと共に伝説を造ったことを。

「私が一機出るより、万全の三機がいつものフォーメーションを組んだほうが効率がいい。それに……。」

そういつてチグリスの方に目を向ける。

「あのゾーリンソールを砲台がわりに使えばいい。」

「な!?!ちよつと待て風天!せつかくの強奪機体を実戦で使う気が!」

「砲台がわりなんだし、戦艦のミノフスキー・バリアーも使える事

だし、いいじゃないか。よし、一堂、配置につけ！！ヒマな奴はとつとと監視につけ！！解散！！！！」

「おい、ちよっ・・・」

チグリスの反論は虚しく、再び活気を取り戻したデッキの雑音の中に消えていった。

月への旅路で（後書き）

* 舞台裏トーク*

風天「あああ、私の出番がなくなった。これは一体どういうことだ、うp主!!」

筆者「いやはや、ガンダム小説で無双をやるのは虚しいだけだって思いましたな。」

風天「おいおい、無双なんてキラ君じゃないんだから無理だって。」

筆者「でも、キラ君と比べれば君の方が強いだろう?」

風天「実証のない事を!」

筆者「んじゃ、SEEDの世界に飛ばしてやるつか?」

風天「謹んで辞退させて頂きます。」

チャンチャン

ジャック・ブルーム

ジャック・ブルームはメタトロンの旧式戦艦ラーカイラム級のMMデッキで一人黄昏れていた。彼は決して若い訳ではない。もう既に五十を越えていた。そう、彼はメタトロンが出来た頃からいたメンバーの一人であった。そんな彼は、昔の事を思い出していた。

（あゝあ、昔はホントにのどかなボランティア団体みたいなものだったなあ。俺もあの頃はそんな彼等の理想に込めて参加したようなものだった。でも、いつの間にか権力争いが起きて、いつの間にかマンマシンの訓練をしていて、いつの間にかメタトロンが立派な軍隊になっちまった。どうしてだ！確かにマハは許せない、けどなんで俺が軍人として生きなきゃいけないんだ！一体いつこんな組織化が進んじまったんだ！・・・今更悔いてもしょうがないけど、納得もできやしないな・・・）

彼はずっとそんな事を考えていた。そんなとき、後から突然肩を叩かれる。何かと思えば、パラオでガウツサを一機落としたアンディさんだった。

「おいジャック、何落ち込んでいるんだい？」

黄昏れていた所を見られたのだろうか、心配をかけてくれる。本当にいい人だ、と俺は感じた。だから、なおさら心配をかけさせる訳にはいかない。

「いえいえ、ただ昔の事を思い出していただけです。」

「そうか、だったら良いんだが・・・そうだ！ジャック、目をつぶ

っている！」

「……？」

なんだか嫌な予感がするが、とにかく目を閉じる。すると、強烈な痛みが頬を伝った。アンデイが俺の頬にビンタを食らわせたのだ！俺は、目が醒めたような感覚を味わうと共に、怒りを感じた。

「なっ！いきなり何をするんですか！？」

「よしよし、気合いは十分だな。ジャック、戦争っていうのはな、気合いが足りてねえ奴から先に死ぬのさ。そういう訳では、俺が気合いを入れ直してやったという訳よ！経験者の言うことだから、間違いないぜ！」

なんてこじつけなんだ、と俺は思った。本当に、軍人らしい人だから、俺とは違ってみんなに好かれているんだがな。

しかし、お気楽な雰囲気はアラートであっという間に吹き飛んだ。どうやら目標の敵艦に追いついたらしい。艦内に艦長の声が響く。

<第一戦闘配備！マンマシーンパイロットは、直ちに発進準備に取り掛かれ！>

「さあて、俺達の出番という訳だ。ジャック、相手は黒いシユバツテン級と聞いたぜ。コイツは間違いなく地球連邦軍の伝説が率いる部隊に違いない。決して気を抜くんじゃないぞ！」

「分かってますよ。アンデイさんこそ、大丈夫なんですか？」

「あつたりまえよ！さあ、さっさと終わらせて、ビールで乾杯といこうじゃないかー！」

「ええ、勿論！！」

そういつて、俺達は戦場に飛び込んでいった。

カオス・ブリーフィング

「それにしても、本当、少佐のおてんばぶりには苦勞するねえ。そう思わないかいクローゼ君？」

「いいえ、そうは思いませんが？慣れましたから。」

愚痴をこぼすアルベルト大尉。それにサラリとクールに返すクローゼ中尉。ただのいつもの光景であります。おっと、私はニヨルズ!! アスラビスク。この艦のオペレーターを務めさせていただいています。本当に変わらない光景ですが、何時もと違う所と言えば……

「慣れた？あれにか？おいおい、それはないだろう。あんなのに慣れる事の出来るのはゴキブリくらいだぜ？」

「ゴキブリ位で悪かったな、アルベルト。」

「そうそう、悪いつたりやありやし……て、うおお?!ふ、風天少佐!!!いつの間に?!」

風天さんがブリッジに上がっていたということでした。

「さてさて、アルベルト、お前がゴキブリのように逃げ回るんだな。」

そついいながらゴキリゴキリと指を鳴らす音が聞こえてきます。何だかヤバそうなオーラも出ています。面倒な事になるかと思いきや、流石にクローゼ中尉が止めに入りました。

「風天少佐、アルベルト大尉、争い事は、あのレーダー上の艦の対処をしてからにしましょう。」

「何!？」

同時にモニターを覗き込む風天さんとアルベルト大尉。そこには、確かにラーカイルム級を表す識別信号がかかれていました。

「ラーカイルム?今更何故?」

通信士のミナダ「スウが疑問の声をあげます。」

ア「この船より早いスピードで航行しているな。ということは・・・」

ふ「ブースターを履いているということだな。そして通常ならブースターをつける必要はない。」

ク「つまり、急いで我々を追いかけてきたメタトロンという訳ですね。しかし、推測だけで敵艦と判断する訳にはいかない。さて、どうしたのですかな。」

何時もはゴタゴタしていますが、こういう話はテキパキとタイミンクよく繋がっていきます。本当、仲が良いんだが悪いんだか。

ふ「地球連邦軍名義で通信文を飛ばす。」

ク「Non、うまくかわされるでしょう。一気に接近して強行偵察。」

ア「Non、兵の命がもつたない。連邦軍と繋いで実働しているライカイルム級と照合。」

ふ「Non、時間がかかりすぎる。その前に攻撃されたら本も子もない。」

再び悩む三人。その時、というか以前から思っていたのですが、私はマハラしいやり方をしてみたいとちよつと興味を持ちました。ここは駄目元で提案してみます。

「マハという事で捜索を拒否されたら強制排除っていうのはどうでしょう?」

「「「それだ!!!」」」

おお、珍しいこともあるものです。こんなに綺麗にはもったのは初めてです。ちよつと感動・・・って、ええええええ!!私の提案、通っちゃったの!?本当に、今日は何時もととは変わった日です。

開戦の光

<こちらはマハのシユバツテンだ。そのラーカイラム級、貴艦の所属と目的を応えよ。>

「こちらは、地球連邦軍宇宙警備隊所属艦である。目的は月地球連邦軍基地への帰還である。」

目の前の敵艦から通信が入る。当然、所属については予測済みだ。きっちり練った対策どうり応答した。しかし、相手はほぼ確定的に黒い神獣の率いる船である。一筋縄にはいかないだろう。

<連邦政府に確認したが、貴艦の存在は認証されていない。よって、貴艦の調査をしたい。>

どうせハツタリだろう。こんなに早く船を確認することなど不可能だ。だから、私は自信を持っていった。

「こちらは近日連邦政府の承認を受けたばかりだ。まだ登録が追いついていないのだ。よって、調査は不要だ。」

そう、ここまで言ったら調査などは出来ない。私はそう思っていた。だが、私はマハというものを知らなかった。

<そうか・・・ならば、>

ブリッジにアラート音が響く。私は、急な展開に何が起こったのか理解出来なかった。

< 貴艦を強制排除する。 >

その通信を合図に、ビームの雨が私達に降り注いだ。直後、ブリッジは酷い振動に包まれた。

「ブースター被弾！切り離します！」

「左舷メインカタパルト被弾！」

「機首ミサイル発射管被弾！誘爆します！！！」

「艦長！！指揮を！！！」

とりあえず頬をつねってみる。痛い。とても痛い。私は、やっとこれが夢でないことに気がついた。

「ダメージコントロール班を行かせる！ノーマルスーツ着用！ミノフスキー粒子、戦闘濃度散布！マンマシーン隊、緊急発進！対空放火開け！！！」

とにかく一連の命令を下す。再び、ブリッジに激震が走った。

「よし、不意打ちは成功したな。こちらもマンマシーンを発進させる！ミノフスキーバリアー出力最大！最大戦速で月警戒エリア内に飛び込むぞ！！！」

シユバッテンが加速する。と同時に、対空放火をぬって三機のガウ

ツサが出撃した。しかし、敵は四機のVガンダム、更にはなんとエース機V2ガンダムまでいる。

「少佐、V2は流石にまずいんじゃないのですか？」

「まあ、確かにな。よし、私も行く！！」

ブリッジを出ていく風天少佐。それをアルベルトとクローゼは見送った。

ビームが宇宙を駆ける。アンディは内心焦っていた。ゾーリンソールが出ていない上、自分の部下は三機のガウツサに翻弄されていて、更には自分はシュバッテンからの集中放火で身動きがとれずにいた。

「クソ、エフィールドがあれば・・・」

しかし、迂闊にそうするわけにはいかない。エフィールドは機体を大きく円で囲む様に展開される。なので、集中放火を受けている時に展開すれば、余計なビームも弾いてしまい、大きくエネルギーを消費してしまうのだ。

そういう訳で、彼はなかなか攻めきれないでいた。全ては、アルベルト達の作戦どおりであった。

開戦の光（後書き）

書き忘れていましたが、このV2ガンダムはアサルト装備です。

微かな顕現（前書き）

チギリス「全く、風天の奴、勝手な事言いやがって！」

マリィダ「そうカツカするな。作戦上仕方のない事だろう？」

チ「いや、これは作者の陰謀だ！間違いない、私には分かる！」

マ「こいつはナンセンスだな・・・このバカはほつといて・・・えつと、人生謳歌さん、感想、感謝します。」

チ「まさかガイア ギアを知っている方が読んでくれていたただなんて・・・汗水垂らした甲斐があつたつてもんだね。」

マ「最も、知らない人はこの小説を読んでもらってガイア ギアに興味を持って貰いたいものだな。」

チ「そんな事で・・・」

チ&マ「本編をお楽しみ下さい！」

微かな顕現

”キイイイーン”

「・・・！なんだ!？」

急に宙に振り向く風天。その先にはただ船の隔壁があるだけなのだが、風天は確かにプレッシャーを感じた。

「ニュータイプ? いや、いても不思議じゃない、か。」

風天は漠然とした不安を感じながらマンマシーンデッキに流れていった。

「・・・! ?なんだ、この感覚?」

その男は、一瞬不思議な感覚に包まれたのを感じた。ジャックはふとその感覚がした方向を向いた。だが、その瞬間、嫌な気配を感じ、とつさにレバーを切った。すると、目の前に一本の閃光が走った。ジャックは困惑した。全く無意識の内にビームを回避した事に。しかし、悩んでいる時間はなかった。再びガウツサから飛んでくる閃光。

(し、しまった!?)

ジャックは、このビームが直撃であると直感した。しかし、最早間に合わない。

「か、神様……！」

こんなオッサンになって情けない、と普通はいう所だが、こういう場面に直面したとき、人間は神や仏に祈ってしまうものである。そして、Vガンダムのコックピットが光に包まれた、かのように見えた。

「何！？V2ガンダム？！戦艦の弾膜を振り切ったのか！？」

自分の放った必殺の一撃が突如現れたV2のシールドビットに止められたのを見て、必然的にそれを悟った。そして、後ろから飛んでくる強力な火線。おおよそ、ヴェズバーであろう。ガウツサでも一撃で吹き飛ばす強力なビームに、ラルバは戦慄した。その直後、通信が入る。

「ラルバさん、危ない！！」

とつさにシールドを構え、回避運動をとる。一応当たらなかつたが、これで完全にこちらの包囲網が崩されてしまった。

「……いかん！ハル、シュタイン、一旦帰還するぞ！！」

すぐに帰還を指示する。このまま戦闘を続ければこちらが負けるのは必然的。ベテランらしい素晴らしい判断能力である。バーニアを

吹かし、後退の意志を見せる三機のガウツサ。当然、メタトロンは追撃をしかけてくる。最大出力でバーニアを吹かしているため、下手な射撃には当たらないが、V2ガンダムが光の翼を展開したのを見て、さすがにまずいと思うラルバ。あっという間に距離を詰めてくるのを見越して、ビームサーベルを握り、反転する。

「うおおおおおー!!」

コックピットに相手の雄叫びが響く。そして、ガウツサとV2のサーベルが交差する。圧倒的なスピードをつけたV2に押されるガウツサ。V2がサーベルを押し切る。そのままの速度を保ち、太陽を背にしながら突っ込むV2。減光されているとはいえ、太陽に目を眩まされる。その時、突如通信が飛んできた。

「アンディさん、下がって!!」

ラルバは一瞬、その通信の意味を理解出来なかった。というか、考える気もなかった。直後、ビームキャノンがV2の足を貫いた。ラルバはハツとして留めをかけるが、Vガンダムのビームがそれを阻害した。どうやら、甲板から風天少佐が狙撃したようだ。ラルバは、助かったと思い、ガウツサをシュバッテンに向かわせるのであった。

グラナダ・ゾーン

空は暗い、が、人々の活気は消えない。風天は、アルベルトと共にグラナダの市内を歩いていて、空を見上げれば、透明のガラスの先に人々の熱気とは無関係のように居座る宇宙があった。風天は、歩きながらその星々の輝きを見つめていた。

「どうされたのですか、少佐？」

こちらが気になったのか、アルベルトが心配そうに声をかけてきた。

「いや、なんでもない。」

「そうですか。少佐、そんな顔しないで下さい。今どこに向かっているのか、分かっているのですか？」

「ん？なんだ、マヌケの様な顔でもしていたのか？」

そいつは問題だなあ、と微笑み帰す。

「全く、笑ってごまかさないで下さいよ。」

「いやいや、スマンスマン。ちゃんとするから、ゴチャゴチャ言わない。」

そういつて、私はアルベルトの頭をポンポンと叩く。アルベルトはといえば、呆れた表情を私に帰してくるのであった。

その建物は、一体どういう風に表現すればよいのだろうか？いや、決して表現出来ない訳ではない。その建物は、まさしく中世の貴族の屋敷であった。問題はそこではなく、この時代遅れの建物が、嫌というほどこのグラナダの風景に溶け込んでいることである。それは、こんな市街地に堂々と建っているからであろうか？そんな屋敷の玄関に、風天とアルベルトは立っていた。

「風天少佐、アルベルト大尉です！！作戦の報告に参りました！！」
つくづく思うに、何故この屋敷にはインターフォンがないのだろうか？そういう所はさっさと近代化してほしいものだ。
カチャリと音がして、ゆっくりと扉が開く。

「お待ちしておりました、風天少佐、アルベルト大尉。ささ、中で閣下がお待ちしております。」

現れたのはアルビノ体質の青年だ。確か、ビシャ・イザヨイといったか？一応地球連邦軍の将校だが、今はわけあってここにいる。

「それもそうだが、取り合えずさっさとインターフォンを取り付けたらどうだい？」

アルベルトがいやらしい声でそんな事を言うが、笑ってごまかされるのであった。

「・・・という訳で、メタトロンはオリジナルのマンマシンを製作していたと言うことです。」

「報告はそれだけか？」

「ええ、まあ・・・。」

「それは、厄介な事になったわねえ・・・。」

ギロリと冷たい視線が飛びかう。やはり、何年経つてもこういう空気には慣れるものではない。それに、久しぶりの出撃でこっちは神経をすり減らしている。風天はいますぐ逃げ出したい衝動に駆られた。

「しかし、そういう事になれば、やっと我々の権限を連邦軍内で引き上げる事ができるな。」

そういうのは紫色の髪が特徴的な女性である。その立ち振る舞いは、まるで旧世紀の貴族そのものである。彼女の名は、セラーナ「カーン」。地球連邦政府テロ対策室総監であり、地球連邦軍中將というご立派な肩書を持った高官である。その名の通り、彼女はかの有名なハマーン「カーン」の妹である。が、見た目はどう見ても三十代である。これには色々と事情があるのだが、そのことは後日、説明することにする。

「そのための作戦でしたから。今回の結果は、ダーゴル大佐もお喜びになるでしょう。」

対してこちらの女性はマリーヌ「ナジス大尉。マン・ハンターの将官であり、ダーゴル大佐の秘書でもある。秘書なだけに、それ相応

の能力を持っているが、兵達の間では、ダーゴル大佐を手に入れるのに全能力を使ってしまっている残念な美女と言われている。本人は心外のようなが・・・ハッキリ言って、その用にしか見えないのが事実だ。

「さて、風天少佐。」

「はっ。」

上でも言った通り、ナジス大尉は色々特別なので、少佐の自分でも命令される側になってしまう。

「奪取した機体は、ここグラナダで解析する。少佐には、一旦コンペイトウに赴き、本部の通達を待つて貰う。いいかな？」

「はっ、了解しました。直ちにコンペイトウに向け、出航いたします。」

そういつて、私はさっさと退出しようとした。だが、

「待て風天。久しぶりなんだから、少しばかり話に付き合ってくれないか？」

「・・・りょーかい。」

なぜだか、ベッドが恋しくなった。

ルック・アット・ミー

ソファアーに腰を掛ける。高級なのか、深く沈み込む。悪くはない。だが、やはり彼女は違和感を感じた。

「・・・ソファアーに座って喋るか・・・。なんだか、居心地が悪いな。軍人肌の私には。」

「あら？そうだったの？」

優雅に彼女の横に腰を掛け、砕けた口調で話しかけるセラーナ。会議の時とは大違いである。それも当然、彼女達は本当に長い付き合いなのである。お互いの癖までも知っている程に。ただ・・・

「じゃあ、近くの屋台にでも食べに行かない？」

「・・・はい？」

未だに風天はセラーナの思考が理解出来ないでいた。

”ズズウ~~~~~”

「なんか、こづいづのって懐かしいわねえ。」

「そ、そうだな。」

あんなこと言わなきゃよかったと思ったのも遅く、一応止めはしたがセラーナは権限を振り回して結局屋台で食べる事になってしまった。こいつには地球連邦政府高官ということへの緊張感というものがないのだろうか？それとも、長年やっているせいでこういう事には慣れっこなのだろうか？

「グラナダでこうして宇宙を見ながらラーメンを食べてると、どうしても思い浮かぶわ、あの日々が。」

「また中佐の話ですか？もう何度目だと思っているのですか？」

色々な意味で溜息をつき呆れる風天。その間も二人は

”ズズウ~~~~~”

と、麵を嚼っている。屋敷にいるときには想像出来ない行儀の悪さである。それだけ、セラーナが風天に気を許している証なのだろう。

「なに、老婆っていう生き物は、昔の出来事を何度も何度も話して頭じゃなくて心に刻みつけていくっていう生き物なのよ。そんな事言わずにき・い・て？」

「嫌だな。」

「ええ、ちょっと！なにいつてるの！？聞いてって言ったら聞くのよ！-！」

「い・や・で・す！-！」

普通に断っただけだが、その直後、セラーナはこちらを真剣に見つめながら、目をうるうるさせた。・・・本当に困ったものだ。我ながら、”愛らしくて仕方がない。”

「聞いてくれる?????」

「分かった分かった、ちゃんと聞いてやるよ。」

「ヤッター!!!」

一時期アメリカという国で流行ったらしい日本語を言って、セラーナは嬉しそうに飛び上がり、そして熱心に語り出した。

「あれは、一年戦争の終戦直前だったわ。」

彼は、病で倒れかかっているマレーネ姉さんに付き添ってやってきた。彼の名は、アーレス・ドゥー大尉。一年戦争の前に製作された強化人間だった。だから、彼はニュータイプではなかったわ。そのせいで、彼の存在はザビ家の人間だけでなく、殆どのジオン軍人から侮蔑されていた。だから、会戦直後、最大の激戦区の一つ、アフリカに送り込まれた。しかし、彼はそこで旧式の強化人間としての才能を開花させ、MS戦の基礎を築き、現地のビッター將軍らとも上手くやっていった。だから、少尉だった彼はあつという間に大尉と昇格した。でも、戦争が長引くにつれ、ジオンの旗色が悪くなっていた。

「あれ？なんか話逸れてないか？」

「まあまあ、焦らず焦らず。」

事態は急転し、地球連邦軍は攻撃目標をソロモンに定めた。危機感を感じたビッター將軍は、アーレスを宇宙に送り出した。それは、HLVが二機しかなかった彼等にできる最大の増援だった。

連邦軍との戦いが始まる前に、彼は無事ソロモンに到着した。でも、そこで彼が言い渡された任務は、私の姉、マレーネ・カーンの護衛だった。彼はドズル中将に必死に進言した。自分も出撃すると。だが、ドズル・ザビは言った。お前の様な若僧が、こんな所で死ぬことはない、と。俺の一人娘を頼んだ、と。彼は、出撃したビッグザムに敬礼しながら、ソロモンを離れ、ズム・シティーに向かった。

「それで、アーレス中佐とであつた、だろう？」

「そうよ。アクシズに到着した彼は、お父様から私の警護、教育係りになつたって訳。」

「なんだ、何時もと変わらないじゃないか。」

「まあまあ、今日の本題はここからよ。」

グリプス戦役前、彼は、シャア大佐と共に、地球に降りた。戦争が始まって直後、彼はカラバに入り、ティターンズと戦った。

「そんなことくらい知ってるよ。なんせ、私もいたのだからな。」

「・・・黙って聞け。」

ハマーン戦争が終わり、シャアが行動を始めた。彼は独自に暗礁宙域に軍隊を組織した。その中に、私もいた。でも、私はできるだけ無駄な争いは避けたかった。私は、ネオ・ジオン穏健派として極秘裏に地球連邦政府に休戦協定を結びに言った。その時、地球連邦政府側にアーレスがいた。彼は、私を褒めてくれた。武器を使わずに戦争を止めると決断し、実行したことを。私は、ただただ嬉しかった。だけど、幸福な時間は、そう長くは続かなかった。シャアの率いるネオ・ジオン強硬派は、私を殺そうと、軍隊を送り出してきた！！その結果、協定は破棄され、私は追われる身となった。そんななかでも、私は潤沢な資金を使って戦争被害者達の救援活動を行った。そして、シャアが倒れた後、資金のなくなった私は、月で安静しようと思いついた。グラナダに就いたとき、その空港で私を待っていた人影があった。それは、アーレスだった。私は、そこから彼と共に幸福な時間を取り戻していく、はずだった。

「その後、アーレス中佐は、新たに存在をあらわにした袖付きとの戦いで命を失い、絶望したお前さんを地球連邦政府高官に、私が仕立てあげたって所か？中佐が開発した怪しい注射をして、な。」

「そう、そこから私の苦労が始まったのよね。全ては・・・貴方のせいだね。」

ギロリとこちらを睨みつける。いやいや、あんたが勝手に言ったん

だろ、といたいたいが、残念ながらそんなことを言った暁には、私の首が飛ぶ。リアルで。

「多分、私は彼に恋でもしていたのでしょね。あの時は、彼が私を見つめているだけで、胸がドキドキしたものだっから。」

そういつて、ポタリとこぼれ落ちる水滴。慌てる風天。

「セラーナ、昔のことをどうこう言おうがしょうがないじゃないか！」

「分かっている。分かっている、けど!!!」

ダメだ、コイツ。風天は決心し、右手に力を込める。そして、セラーナの頬を思いつ切り殴り飛ばした。頬を抑えて立ち上がるセラーナ。

「風天……」

「閣下、迷いは晴れましたか？」

「ええ、もう大丈夫。」

セラーナの肩を持ち、二人は歩きだす。

「おい、お金、お金!!!」

そこに残るのは、ラーメン屋店主の悲痛な叫びだけだった。

ダブル・クローサー

光を放つグラナダ市街地。それとは対照的に、宇宙は何処までも暗黒が広がっていた。

月面に走る影が一つ、二つと増えていく。種類は少なく、重装甲のもの、戦士をイメージさせるもの二種類である。その色は、全身をグリーンで塗りがためられた印象的なものであった。それが、上手く宇宙の色と同化して、警戒のセンサーを巧みに避けているのだ。

「あいてててて・・・」

「おい、動くな！軍人なら、このくらい我慢しろ。」

ベツタリ腫れ物用クリームを塗り付けられる。とても効く。本当に良く効く。だから、非常に痛い。これは、どう頑張っても我慢しがたいものだ。

「せ、先生。ちょっと効き過ぎですよ！！」

「騒がない。だいたい、あのラーメン屋の親父にケンカを売ったのが悪いんだよ。」

「だから、あれはただの払い忘れだって・・・いてえ！」

また傷痕にクリームをベツタリとつけるアモン先生。上半身裸の私に当然の用に全身ベツタリクリームをつける。相変わらず容赦がない先生だ。そして汚い。さすが先生、汚い。それでも男かよ！

「何か余計なことでも考えたか？」

「え？いえ、そんなこと……いて!!」

またやりやがったなコイツ!!後で必ず滅俸してやる!!忘れはせんぞ!!そんな時、医務室のドアが開く。誰かと思えば……チグリスだ。

「おう、風天。なかなかこっぴどくやられたな。」

「うるさい、黙って……あいた!!」

「少佐の方がうるさいですよ。チグリス、何時ものやつか？」

「ああ、頼む。」

「？」

残念、全く理解出来ない。クルリと反転し机の引き出しをあさる先生。そこからできたのは三本のびん。あれは……リポビンドじゃないか!!

「おいチグリス!!それをどうするつもりだ!!」

「え？私にも飲ませろ、だって？」

「そつだ！そいつを・・・て違つー！！」

面白そうに笑うチギリス。全く、17歳の少女に笑われる様では、示しもクソもない。反論しようと口を開く。だが、次の瞬間、地面が揺れた。

<うわ、何なんだコイツ等！！！>

<落ち着け！一斉射でカタを・・・うおおお！！！>

<ああ、隊長！！！>

大爆発がまきおこる。そりゃ、核爆発だから当然なのだが。市街地であるのにも関わらずビームが飛び交う。市内を守るように立ち回るのはガウツサ。それにビームの雨を降らせている機体は、どれも緑に統一され、胸にあの有名な紋章、ジオンの旗を掲げていた。

<クソ、コイツ等、ジオンの癖にできる！！！>

<どうする、相棒？>

<後退するしかないだろう！！！>

こんな会話は、本当はとても無責任な物であることを本人達は知らない。彼等が後退すれば、そこにいた人々の命が危ない（もっとも

戦闘中の方が危ないが)。しかし、圧倒的な実戦不足の二人にはそんな考えは思いつかなかった。二機のガウツサは、ビームシールドを張りながら後退を始める。その様子を、下から伺う者がいた。

セラーナは端的に言えばキレていた。防衛線を張らず、勝手に後退したガウツサに対して。

「全く、月駐留隊は何をしていたんだ!!!」

そう言いながらも、彼女は休まず連邦軍本部へ走っていた。何故工レカを使わないのか、といえば、それはグラナダという都市の体系に問題がある。言ってみれば、グラナダは狭すぎるのだ。昼の間はまるで朝の通勤ラッシュかのような人だかりができるのだ。だから、車よりも足でいったほうが早かったりする。

近くのビルにビームが着弾する。落ちて来る大量の破片に対して、セラーナは特有の長い袖で頭をガードする。と、その時、セラーナは反射的に体を反らせた。

くダァーッッく

さっきまで彼女がいたところを銃弾が通り抜ける。ざわめく民衆。懐から拳銃を取り出し、発射本に向ける。子供。オレンジの様な色をした髪少年。突如、彼女の頭の中に、極秘資料に添付されていた写真が思い浮かぶ。

(あれは・・・まさか?!)

ハツとして見れば、その少年が路地の奥に抜けて行くのが見える。セラーナは逃がさじと思ひ、後をおった。

「どうだ、もう逃げられんぞ！」

なんとか路地の奥に追い込むことが出来た。日々絶えず鍛えていた成果が出たようだ。震えてこちらに銃を向ける少年。やはり、あの報告にあつた奴に違いない。

「き、貴様、ジオンの裏切り者が!!」

「そうかい、そいつを言えば満足かい、ザビ家の末裔、トライム!!
ザビ様？」

「何、何故私の名を知っているのだ、セラーナ!!カーン!!貴様の悪行、一体どういう事だ!？」

おうおういつてくれるねえ、たかが12歳の小僧が。それにしても一体どういう事であろうか?ザビ家の血筋となれば、流石に重宝されるはずだが、このように一般兵の用に私を殺しに来るだなんて。何かがおかしい。そう考えているとき、また頭にプレッシャーが走る。反射的に回避。発射元は後ろ。囲まれたのか!?素早く引き金を引こうとするが、もう遅い。第二射が私の肩を打ち抜く。そして放たれる第三射。それは、真っ直ぐ脳天を貫く一撃だった。しかし、

私は堂々と構えた。何故かって？それは、当たらない事が、視えたからだ。

銃弾が右腕に擦り込まれる。が、顔色一つ変えない。そのまま前進する。何発も銃が打ち込まれるが、全く効いていない。悲鳴を上げるジオン兵。無視して、そいつの首と胴体を掴み、思いっ切り引っ張った。あつという間にちぎれる肉体。もはや、人間の原形を留めてはいなかった。そしてそれは、加害者シュタインにも言えたことであった。

ミス・カルキュエイション(前書き)

PV数が増えない・・・

まあ、マイナーな作品なのでしょうがうがないのですが。

ミス・カルキュエイション

「ジオン……か。」

やはり懐かしく思う。それも当然、今は宇宙世紀192年。つまり、私は今年で120歳を迎えることとなる。たった百年の間に、よくもまあ世界は変化を続けたものだ。しかし、人類は今だ何も変わってはいない。

ザビ家の末裔は隙をついて逃げ出したらしく、その路地にはもうセラーナとシュタインしかいなかった。セラーナは空を見上げる。黒いガウツサが二機のガウツサを引き連れて飛んで行くのが見える。ということとは、早々ケリがつくと言っことだろう。傷口の応急手当を済ませたセラーナは、シュタインに抱えて貰い、空を舞った。

<うわ、まずいよ、追いつかれた!!>

<クソッ、ここまでののか?>

逃げまとう二機のガウツサを追撃する「ザクもどき」と「ガルバルデイもどき」。思ったより足が速いのか、新型であるはずのガウツサに食らいついて来る。ライフルからビームが走り、一機のガウツサの足を貫いた。

<しまった!!足をやられた!!>

推力を失って落ちていくガウツサ。そこにガルバルディもどきがビームサーベルを引き抜き加速した！

<や、やられる！！>

慌ててスラスターを吹かすが、時はすでに遅い。

だが、振り落とそうとした直後、急にガルバルディもどきは後退した。降り懸かるビームの雨。

<貴様、よくも好き勝手っ！！>

<チグリス！！前に出過ぎるな！！ハル、援護しろ！>

風天がやっと追いついたのである。応戦するザクもどき。ものすごいビームが飛んで来るが、

<こんな程度！！>

黒いガウツサはスルスルとそれをくぐり抜け、ビームを放つ。直撃。崩れ落ちるザクもどき。

<あ、あれは黒い神獣だ！！>

足のなくなったガウツサのパイロットが叫ぶ。もともとここ二ヶ月で任務に当たっていた風天は、月の将兵達の間では気軽に話かけられる英雄の様な存在であった。

<そこの二機！こちらはシュバッテン所属のマハだ！突っ立ってないで援護に当たれ！！>

茶色のマハカラーのガウツサから通信が入る。

<了解！こちら月防衛隊、援護に当たります！！>

それに応じる二機のガウツサ。戦況は一気にひっくり返り返った。

ガルバルディもどきと切り合う黒いガウツサ。

<コイツ、できる！>

<早々ナメてもらっては困るな、黒い神獣！！>

会話しながらも、手は休まずトリガーを引いている。だが、決定的な一撃は与えられていない。放たれたビームは、ことごとくビルに妨げられていた。そして、ビームサーベルの接近戦も均衡。さらに、周りに味方がいない。どうやら、引き離された用だ。ベテランらしい硬い作戦である。どちらもベテランパイロットである事が、戦闘を長引かせていた。だが、戦況はいつまでも滞ってはいない。プレッシャーを感じた風天は、即座に身を翻した。

<な、俺が外した！！>

空を切るビーム。どうやら、ビルの間隙にザクもどきが隠れていた

用だ。だが、それだけではない。今度は、上からのプレッシャー。ビームサーベルを持って切り込んでくるザクもどき。

< 伏兵とはな!!! >

サーベルを振り下ろすが、その前にガウツサはザクもどきに拳を振り上げ、文字通りビームサーベルを手からひきちぎった。そのまま、奪ったサーベルでコックピットだけを貫く。

< やったな!!! >

ピピピッ、と警戒音が鳴り、ザクもどきの接近を知らせる。

< バカ、止める!! 迂闊に接近するな!!! >

制止の声を無視して切り込んでくるザクもどき。

< うおおおおお!!! >

< 重いんだよ!!! >

ザクもどきがビームサーベルを振り下ろす。それをバックステップでかわすガウツサ。奪ったビームサーベルを握り直し、それを投げる。モノアイを叩き潰すビームサーベル。崩れ落ちるザクもどき。

< 黙らせる!!! >

そのまま、サンドバレルを起動し、追撃をかける。しかし、ガルバルディもどきがそれを阻む。が、そのガルバルディもどきにもビームの雨が降り注いだ。ハル達だ。やっと片がついたのである。

<ぐうは!!!>

あっという間に四肢がもがれるガルバルディもどき。しかし、ガルバルディは、壊れかけた腕でビームサーベルを持ち、ビームの雨を降らせているガウツサに突撃した。

<おおおおお!!ズイージオン、万歳あゝい!!!>

雄叫びがコックピットに鳴り響き、次に聞こえてきたのは落下したガルバルディもどきの振動音だった。

<風天、大丈夫か?>

<ああ、問題ない。そちらも無事そうだな。>

なんとか全滅出来た様だ。風天は一先ずホッと吐息を吐いた。

<防衛隊諸君、援護感謝する。機体はそちらで回収してくれ。>

<<了解!!!>>

そういつて、ハルとチグリスに帰投命令を出す。風天はそこをさっ
て行くとした。

”ドオオオ~~~~ン!!!”

<え？>

突然轟音が鳴り響く。

<おい、カルロス！応答してくれ！！おい！！>

聞こえてきたのは防衛隊のガウツサのパイロットが啜り泣く声。そして、魂が宇宙に飛んでいく感覚。戦闘は、終わったのではなかったのか？風天は混乱した。

<死んだ？死んだのか？>

<おい、応答してくれえ〜！！>

そう。死んだのだ。自分が墜とし損ねたザクもどきが、回収しに来たガウツサと共に自爆したのだ。風天は、襲い掛かってくる吐き気に、頭を抱えた。

ミス・カルキユエイション（後書き）

なんだかあっさりしすぎたかな？、と思ってしまった。

一応これで月編は終了。

これからも少ないPV数に嘆きつつ、細々と頑張っていきます。

順風亭〓風天

「船体各部異常無し！」

「全システム、オールグリーン！」

「よおし、シュバッテン、発進！！！」

暗黒の宇宙に飛び出していく漆黒の船。そのブリッジでは、早くもゴタゴタが始まった様だ。

「新任のオリバー〓カーム曹長です！風天少佐はどちらにいらっしやいますか？」

やっかいごとその一、それは月の防衛隊から一人パイロットが編入してきた事である。クローゼは、その挨拶にシワを寄せる。

「船に乗ったら、まずは艦長に挨拶するのが常識だろう！！一体士官学校で何を学んできた、貴様！？」

「まあまあ、そうカツカするなよクローゼ君。ゴホンゴホン、私がこの船の艦長、アルベルト〓エイム大尉だ。隣のイカ男はクローゼ中尉。あちらのオペレーター席にはミナ ندا君、ニヨルズ君、そして操舵主はトロン君だ。」

「おう新入り！俺はミナンドゥスウ。一応先輩だから、そう呼んだ方がいいかな？」

「私はニヨルズアスラビスク。宜しくね。」

「トロンニブラストだ。まっ、船の事なら任せる。」

「何か余計な言葉が聞こえた気がしますけど・・・？」

一応一通り自己紹介を済ませるブリッジクルー。他の部隊とは違う独特の雰囲気にとじろぐも、

「よ、宜しくお願いします！！」

と、すっかり忘れていた挨拶を済ませるオリバー。しかし、肝心の少佐がまだだ。

「あの、少佐はどちらに・・・？」

「ここで、やっかいごとその二、」

「今、少佐は瞑想しておられる。」

「えっ、瞑想！？」

「ああ、瞑想だ。」

それは、風天少佐が前回の戦闘の後、少佐の意志で取り付けられた”瞑想ルーム”から出て来ない事だ。

因みに、”瞑想ルーム”とは、日本の禅の道場の様な物ではなく、スターウォーズの瞑想室の様なところであり、用途はその名の通り、瞑想する場所である。

「でも、なんで瞑想なんてしているのですか？」

ちよつと疑問に思ったオリバーが尋ねる。だが、

「それは、風天少佐以外誰も知らない事だよ。」

と、サラリと言い返された。だが、クローゼ中尉はこつ付け足した。

「ただ言えることは、風天少佐が先の戦闘で失くなった敵兵や味方兵、一般市民を深く悼んでいる、ということだ。一度戦闘が終わるたび、少佐は何時もあそこに籠るからな。」

「でも、今回は特別長いですよ。多分、自分のミスで人が死んだ事が相当ショックだったのでしょうね。」

ミナンドが後から付け加える。オリバーはただただ驚いた。あれ程英雄視されていた風天少佐が人が死んだ程度でショックを受けた事なのである。普通、長い間軍人をやっていたらいつの間にかショックでふさぎ込む事などなくなるものだ。しかし、風天少佐は現にふさぎ込んでいる。

「どうしたのですか、オリバー曹長？まさか、風天少佐に失望でもしたのですか？」

女の勘というやつなのか、ニヨルズがつぶやく。オリバーは、少し慌てた。

「いえいえ、そういうことではなく……。」

「いいのよ、遠慮しなくても。私だって、初めはそう思ったもの。」

「そうですね……で、ええ!!」

「あの時のイカ男は、ちよつと怖かったわねえ……。」

「そうそう、あの時と同じだなあ。」

何故か回想モードに入るブリッジクルー。しばらくの間、郷愁に駆られるTIMEが始まる、かと思いきや、ブリッジに突然走り込んできた影が、その空気を断ち切った。

「おい、新入り!!ちよつとデッキに来い!!」

「え?つて、あいたたたた!!」

ブリッジから耳を引つ張られて連れていかれるオリバー。だが、ブリッジはそんな事も無視して、勝手に郷愁TIMEに突入した。

「さて、デッキの説明は手短に終わらせよう。先ずは……」
「ええつとその前に、お名前聞かせてくれませんか?」

「ああ、俺はアテルイ・イルマだ。ここの整備長をやっている。」

「オリバー＝カームです。宜しく願いします！」

取り合えず挨拶を済ませて頭を下げる。が、その目はアテルイをじつくりと観察していた。アテルイ＝イルマの名は、連邦の白い悪魔、アムロ＝レイの祖先として、結構有名だったりする。この人があのアテルイさんかあ。

「そんなにじろじろ観察するなよ。これからほぼ毎日会うんだぜ。珍しい物でもなくなるよ。」

こちらの視線に気付いているのか、ギロリと視線が強まるのを感じる。

「ともかく、先ずはこの・・・」

「おお、整備長！コイツが新入りのパイロットか？」

アテルイさんが説明を始めようとしたとき、またやそれを遮る声。アテルイさんの舌打ちが聞こえたが、その人はそれが聞こえていないかの様に完全に無視した。その声の持ち主とは、

「おう、俺はラルバ中尉だ。宜しくな！」

ラルバ中尉である。噂に聞く通り、正にベテランパイロットという体つきをしている。

「オリバー曹長です。こちらこそお世話になります。」

握手をする二人。手のサイズが少々違い過ぎたのか、大人同士の握

手と言うより、親息子の握手に見えるが、そこは問題ではない。オリバーは、ラルバのゴツゴツした手に触れたとき、感じた事があった。

「ラルバ中尉、随分傷を負っているみたいですけど、大丈夫ですか？」

「お、ある程度治してあるのに、良く気付いたな。ま、お前も直にこうなるさ。覚悟しておけよ？」

「は、はい！」

「返事が小さい！」

「は、はい！！！」

「よし、宜しい。」

謎のやり取りをしたあと満足したのか、ラルバ中尉はさっさといった。ラルバ中尉を見送る。だが、その直後、後ろから殺気を感じた。そと肩に置かれる手。振り返って見れば、そこには恐ろしい顔をしたアテルイさんが！！

「さてさて、俺の仕事時間を削っただけ、愚痴の相手にでもなってもらおうかな？」

「・・・オワタ、ハハハ！」

その後、何時間もオリバーはみっちり絞られる事となった。そして、彼はあることを学んだ。

「何があっても整備長の機嫌だけは損ねてはいけない。」

全能の名を持つ天使

突然だが、「シャダイ」という言葉に聞き覚えはないだろうか？
まあ、聞き覚えのない方が殆どであろう。これは、学校の歴史の授業で習わなければ、一般的な本で見かけることもない。この言葉が言い表す物は、言ってみれば「304」という数字をヘブライ語で表したものである。

では、「304」とは何なのであるだろうか？・・・まあ、すぐに頭に何か思い浮かぶような数字ではないだろう。ここで重要なのは、この数字の略号が「31」という数字であることだ。

「31」とは、ギリシャで言うならゼウス神を指す。つまり、シャダイとはヘブライ語での全能神にあたるということだ。そして、同時に「31」という数字は、天使メタトロンを示しているのだ。その、天使メタトロンは、今、サイド2の廃棄コロニーの一角に潜んでいた。

「面倒な事態だな・・・」

立派な髭を蓄えた男性が一人艦長席に沈み込む。すると、奥のドアから実直そうな士官が一人入ってきた。

「マドラスです。ハンゾウ司令、パニッシュ提督からの暗号通信です。」

「読み上げる。」

「はっ。月ノ離反者ノ手ヲ逃レタ”シユバツテン”ヲ追撃セヨ。目標ハ、ソロモンニ移動中。当宙域ヲ横切ル予定デアル、です。」

「成る程、この為に、新型マンマシーンが送られて来た訳だ。・・・退出していいぞ、マドラス。」

「はっ、了解しました!」

「そんなに畏まることはない。一応、軍隊ではないのだからな。」
マドラスが退出して、ハンゾウは一つの資料を引っ張り出した。

「新型MM、デルタセカンドか・・・。それに、PROJECT<シヤア再生>とはな。胡散臭いものだな。」

ハンゾウは、忌ま忌ましく資料を引き出しにしまった。

<こんにちは、ヘラス通信の時間です!>

”チャラ〜”

<グリニッジ標準時、13時です。こんにちは、幽々子です。>

<ルナサです。まずは、月の話題からです。>

< ちよつと、相変わらず愛想がないわねえ、貴女。 >

< ……先日、月グラナダにて、地球連邦政府高官であるセラーナ
IIカーン襲撃事件が発生しました。 >

< む、無視ですか……え、えつと、現地にはリポーターの織さん
に行ってもらっています。しきさくん!!! >

「……相変わらず、情報の早い連中だな。」

「流石、マスコミって所かな。おお、怖い怖い。」

フリーフィングルームでテレビモニターを真剣に見つめる。現在警戒体制が敷かれているのだが、人員数が足りている、そして、レーダー性能が非常に高いシユバツテンでは、パイロットまでもが警戒に当たる必要がない。そんな訳で、ハルとチグリスはここでリラックスしていた。

「……マシンの整備でも手伝いにいこうかな?」

「そうだな。」

部屋を出ようとドアを開けるハル。直後、何かと追突した。

「馬鹿だねえ、お前達。」

「す、すみません・・・」

医務室で手当てを受ける男二人。ハルとオリバーである。どうやら、月にはなれていた様だが、無重力には慣れていなかったらしい。アモンは呆れた顔をした。

「全く、伝説の中隊がこんな物でいいのかねえ・・・風天に報告しておくよ。」

「・・・はあ。」

「冗談だよ。さっ、さっさと持ち場に戻りな。そろそろ、コンペイトウに入港だぞ。」

男二人は、みっともない表情をして退出していった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6868v/>

ガイア ギア～マハの興亡～

2011年10月11日13時00分発行